



Title	西大寺本金光明最勝王經平安初期点における中国口語起源二字漢語の訓読 : 二字副詞を中心として
Author(s)	唐, 煒
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 133, 79(左)-101(左)
Issue Date	2011-03-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44970
Type	bulletin (article)
File Information	133_3.pdf



[Instructions for use](#)

西大寺本金光明最勝王經平安初期点における 中国口語起源二字漢語の訓読 — 二字副詞を中心として —

唐 焯

1. はじめに

義浄訳の『金光明最勝王經』が日本に舶載されたのは、漢訳ができたわずか15年後だという。六朝期には仏典の漢訳がさかんであるが、このうちにも複音節語は多くあらわれ、仏家が伝統の雅なる言い方にこだわることなく、当時の口語中の語彙を多量に用いた。特に四字一句を基調とすることが多いが、それと密接に関連するのが二音節語の多用であり、口語語彙が多く含まれている。通常の漢文が文語で作られているのと性格が異なる、口語を多く取り入れた文体となっている。漢文の訓読は原則として単音節語の中国の文語体を、日本の文語体で読むことであり、複音節化した中国の口語体を従来の漢文訓読で訓読するのには、どうしても無理があり、原典の意味のとりちがえも生じた。仏典が口語表現を含むことについては、従来も多くの指摘がなされているが、本格的な調査は進んでいない。

日本人にとって外国語理解の基本は単語であり、日本の訓点で其れらの中国口語起源の二字漢語を読解し得ているか否かを検討する為に、本論文は、代表的平安初期訓点資料である西大寺本金光明最勝王經平安初期点における口語起源二字漢語副詞の訓読を検証する。本論文では、前に検討した『日本書紀』訓点資料の例(唐2009)に倣って中国口語起源二字副詞の箇所を、本資料が如何に訓読しているかを検討する。

2. 研究方法

訓点資料は春日政治による訓点語学の記念碑的労作『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』を用いる。同本は830年頃の加点の詳細な訓点資料であり、(岩波書店, 1942年12月)に影印・読み下文・研究が公刊されている。中国口語表現自体の研究については、太田(1958, 改訂1981)が画期的なものであり、本論文でも大いに参考としている。また、金岡(1978)・志村(1984)・塩見(1995)・程(1992, 改訂1994), 程(2003)等の専門書も参考とした。松尾(1987)は唐代口語研究の視点から積極的に『日本書紀』を取り上げ、訓読にも踏み込んでいるので大いに参考とし、また、松尾(1986a)(1988)の中国口語表現に関しての論文も参考とした。また、中国口語表現を多く含む敦煌変文の張・黄(1997)の校注も参考としている。尚、二字漢語の由来を概観する上で、その二字漢語自身が古典漢文にも出て来る単語であるか、或いは魏晋南北朝から使われた単語であるか、又仏典特有語か、或いは仏典にも出て来ない俗語かによって、訓読する難易度が異なり、学習の方法も異なるので、データベースである「国学宝典」「CBETA 電子仏典」や『敦煌変文校注』を利用して、使用典籍・年代・繁寡等を知る手がかりとするが、本論文の目的は西大寺本金光明最勝王経平安初期点中の主として中国口語起源の二字漢語を取り上げて、それらの箇所がどのように訓まれているかを解明して行くのであるが、とりわけ目につく二字副詞を考察する。

前に検討した『日本書紀』訓点資料の例に倣って検討するが、本資料では

- I 二字一語として訓んでいる例
 - I-1 一語として訓んでいる例
 - I-2 合符のみを加点している例
- II 二字一語として訓んでいない例
 - II-1 二字一語として訓まず和訓も不当な例
 - II-2 二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない例
- III 二字一語として訓んでいるか否か不明な例

と分類して考察する。『日本書紀』訓点資料と異り、本資料では音読語も多くなり、日本語一語として訓んでいるか否か不明な箇所も少ないので、Ⅲの分類基準を立てる。

ここで取り上げる一語・二語という認定は、現代の文法規準の一語・二語ではなく、訓点を加点した者の意識としての一語・二語という規準である。日本人の単語意識は、現代と平安時代とは異り（石塚 1985・1986）又、『日本書紀』岩崎本平安中期点以外では明確に示されていないが、熟合符・訓合符、加点位置（二字に亘って訓点を付けているか否か等）などを参考として、その二字漢語が一概念として訓まれているか二概念として訓まれているかを規準として分類する。

3. 二字副詞の訓読

二字副詞は下記の 15 語を検討する。

一一	一時	各自	更不	更無	更復	最為	自然
終不	即便	都無	非時	非所	無非	並悉	

I 二字一語として訓んでいる例

I-1 一語として訓んでいる例

(I-1-1) 一時

<1> 大千世界所有衆生。一時皆得成就人身。p.54 一時に

<2> 大地及諸山。一時皆震動。p.196 一時に皆震^{*}動

<3> 隨喜護正法心。一時同声。p.205 一時に同して声を

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』22例、『晋書』118例、『梁書』24例、『魏書』58例、『隋書』35例、『樂府詩集』23例、『世説新語』13例、『祖堂集』35例、『遊仙窟』4例がある。一部の例を示す。

珍國之眾，一時土崩。（『梁書』・卷1）

一時蕩盡。（『晋書』・卷27）

一時放免。(『魏書』・卷 19)

此一時之功也。(『後漢書』・卷 18)

但筋力精神，一時撈竭。(『隋書』・卷 2)

一時放卻，當處解脫。(『祖堂集』・卷 3)

一時絕嘆，以為名通。(『世說新語』・文学第四)

五日一時來，觀者滿路傍。(『樂府詩集』・卷 18)

『遊仙窟』醍醐寺本 1344 年点

眾人皆大笑，一時俱坐， 「一時に」

一時大笑。 「一時に」

又一時大笑。 「一時に」

死去一時休， 「一時に」

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると 12,685 用例 (含名詞, 因みに華嚴部 133 例中の副詞の用例は 61 例) が存在する。2 例を示す。

一時演説。(于闐國三藏實叉難陀奉制譯『大方廣佛華嚴經卷第三十九』10-207)

一時隱沒俱不現。(傳法大師臣施護奉詔譯『佛說護國尊者所問大乘經卷第四』) 12-13

『敦煌變文校注』には 49 例がある。2 例を示す。

一時打其鼓不鳴。(『李陵變文』)

將士聞言，一時入草。(『李陵變文』)

塩見 (1995) では「一斉に、即座に」の意の「一時」は『世說新語』容止篇に現れる。唐詩でも頻用される語彙であるが、中唐以降になってからで、盛唐ではまだ珍しい。たとえば願学禪門非想定，千愁萬年一時空(白居易 晏坐閒吟)」とするが、実際には前記の如く唐以前にも相当数の用例がある。松尾 (1987) では古訓「モロトモニ」は適切と説明している。『日本書紀』の訓点本では「モロトモニ」と訓み、一語として訓んでいるもの(前田本院政期点等)が多いが、一語とは認定しないもの(岩崎本平安中期点)もある。

本資料では、「(モロトモ)に」と訓んだものか「(音誦)に」と訓んだものが不明であるが何れにしても一語として訓んでいる。

(I-1-2) 非時 (音読一語)

<1> 惡風起無恒。暴雨非時下。p.160 非時に下^シ

<2> 非時降霜雹。飢疫苦流行 p.161 非時に降^リ霜雹を

漢籍用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』5例、『後漢書』2例、『晋書』14例、『梁書』0例、『魏書』4例、『隋書』6例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』2例、『樂府詩集』1例、『世説新語』1例がある。一部の例を示す。

急則不入，非時則占。(『漢書』・卷26)

欲諫則非時，欲默則不能已。(『漢書』・卷87)

是年六月马太后崩，土功非時兴故也。(『後漢書』・卷16)

坦之有风格，尤非時俗放蕩，不敦儒教。(『晋書』・卷75)

器非時用，生不振世，没无令声。(『魏書』・卷24)

随四时色吉，非時色凶。(『隋書』・卷21)

爱人如赤子，不杀非時草。(『樂府詩集』・卷86)

问以非時，何得在此？(『世説新語』・任诞第23)

非時作摩生？(『祖堂集』・卷11)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、3175例が存在する。2例を示す。

生死畏。不同意畏。非時受生畏。(東晋天竺三藏佛駄跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經卷第五十二』729-05)

何等名為時非時捨。童子當知。(大唐三藏法師玄奘奉詔譯『大寶積經卷第四十一』238-03)

『敦煌變文校注』には4例がある。2例を示す。

直至东宫门下，非時入内，直见皇儲。(『降魔變文』)

长者见目连非時乞食。(『大目乾连冥间救母變文』)

江藍生・曹広順(1997)では「非時」は「時間どおりではない」の意味とする。

古くから存在している二字副詞であり、本資料では「(音読)に」と一語として訓んでいるものと見做される。

(I-1-3) 自然

- <1> 来自然顕現。於蓮花上有四如来。p.6 自然に顕現せり
- <2> 無碍大慈。自然救摂。若見有情修習邪行。p.18 自然に救摂たまふ
- <3> 無碍大悲自然救摂。是如来行。善男子。p.18 自然に救摂たまふ
- <4> 其土人民自然受楽。p.102 自然に受む楽を
- <5> 七宝妙宮随意受用。各各自然有七千天 p.153 各各自然に

漢籍用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』4例、『晋書』18例、『梁書』5例、『魏書』11例、『隋書』6例、『楽府詩集』9例、『世説新語』6例、『遊仙窟』2例、『祖堂集』12例、一部の例を示す。

百城聞風，自然竦震。（『後漢書』・卷31）

知妖逆之徒自然消珍也。（『晋書』・卷28）

若糧運不通，自然離散，（『梁書』・卷1）

行之積久，自然致治。（『魏書』・卷54）

自然而有，（『隋書』・卷35）

年在桑榆，自然至此。（『世説新語』・言語第2）

雖資自然色，誰能棄薄妝。（『楽府詩集』・卷28）

天衣錫體，自然浮出，（『遊仙窟』）醍醐寺本 1344 年点「自 - 然と」

自然能舉止，可念無比方。（『遊仙窟』）醍醐寺本 1344 年点「自 - 然と」

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、11,968 用例（含名詞，因みに『大正新脩大藏經』第二卷阿含部の 127 例中の副詞の用例は 63 例）が存在する。2 例を示す。

栗自然例裂。（後秦弘始年佛陀耶舍共竺佛念譯『佛説長阿含經卷第十八』1-121）

大寶自然而至。（後秦龜茲國三藏法師『妙法蓮華經卷第二』9-17）

『敦煌變文校注』には 31 例がある。4 例を示す。

災祥自然消散（『燕子賦』）

法界自然安樂。（『廬山遠公話』）

天男天女自然弦歌。（『破魔變』）

體瑩而琉璃不異，自然清淨，（『維摩詰經講經文』）

太田（1958，改訂1981）では、「自然」は、自然に、當然、もとよりなどの意がある」とする。『日本書紀』の訓点では、「ヲノヅカラニ」と一語の和訓として訓んでいる。（『遊仙窟』）醍醐寺本1344年点の2例は、「（音読）とヲノヅカラニ」と文選訓みしている。

本資料では「（ヲノヅカラ）に」と訓んだものか「（音読）に」と訓んだものか不明であるが、何れにしても一語として訓んでいる。

I-2 合符のみを加点している例 1語

(I-2-1) 即便

- <1> 聞如是電王名字。及知方处者。此人即便 p.124 即-便（朱-永長2年点）
- <2> 時王即便礼宝積。恭敬合掌而致請 p.165 即-便
- <3> 苦哉今日失我愛子。即便捫淚慰喻夫 p.93 即-便
- <4> 即便馳駕望前路。一心詣彼捨身崖 p.198 無点

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』3例、『晋書』7例、『梁書』0例、『魏書』5例、『隋書』0例、『樂府詩集』0例、『世説新語』2例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』3例がある。一部の例を示す。

堂勒兵追討，即便奔散。（『後漢書』・卷31）

臣被詔之日，即便東下。（『晋書』・卷42）

時以此既邊將之常，即便听許。（『魏書』・卷110）

適來見什摩道理，即便大笑。（『祖堂集』・卷14）

即便夜乘小舟就文。（『世説新語』・任誕第23）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、6516用例がある。2例を示す。

懈怠比丘即便臥息。（後秦弘始年佛陀耶舍共竺佛念譯『佛説長阿含經卷第九』1-55）

即便驅逐令出國界。（北涼天竺三藏曇無讖譯『大般涅槃經卷第二』12-378）
『敦煌變文校注』には25例がある。4例を示す。

今來助國，即便拜為左相。（『秋胡變文』）

探得軍機，即便回來。（『韓擒虎話本』）

太子見已，即便驚忙。（『八相變』）

走到門前略看，即便卻來同飲。（『難陀出家緣起』）

松尾（1987）では「即」も「便」も「スナハチ」，二字合さっても「スナハチ」。また逆の「便即」も同じ。」と説明している。王（1986）では「即」と「便」が同義であることが示され，そしてこの二語は「即便」として連合式複音時間副詞を構成して「すぐ」の意味を示すとする。

日本書紀の訓点では，前田本院政期点・図書寮本 1142 年点が熟合符及び和訓「スナハチ」を加点して的確に一語で訓んでいる。

本資料では，合符のみの加点であるが一語として訓んでいるものと見做される。

II 二字一語として訓んでいない例

II-1 二字一語として訓まず和訓も不当な例

(II-1-1) 各自

〈1〉各自脱衣。供養菩薩。重発無上。p.95 各自脱^ラ衣^を

〈2〉尔時当与眷属無量无边薬又諸神。各自隱形為作。p.101 各自隱^{ラカクシ}形^をは

〈3〉二十八部薬又諸神俱詣其所。各自隱形随處。p.55 各自隱^ラ形^を

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると『漢書』25例，『後漢書』16例，『晋書』11例，『梁書』2例，『魏書』9例，『隋書』14例，『樂府詩集』17例，『世説新語』1例，『祖堂集』13例，『遊仙窟』1例がある。一部の例を示す。

方士所興祠，各自主持，（『漢書』・卷25）

人不自呆，各自顧望。（『後漢書』・卷33）

宜使各自服其母。（『晋書』・卷20）

人各自舉學士二人，（『梁書』・卷25）

听其人各自陳訴；（『魏書』・卷11）

當日者各自為宮，（『隋書』・卷49）

各自相爭，就講主証明。（『祖堂集』・卷2）

各自饑困，以君之賢，（『世説新語』・徳行第1）

鳥生如欲飛，二飛各自去。（『楽府詩集』・巻47）

各自相讓，俱不肯先坐。（『遊仙窟』）醍醐寺本1344年点「各，自」
仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、2162用例がある。
2例を示す。

其八千象然後各自入池洗浴，飲食。（後秦弘始年佛陀耶舎共竺佛念譯『佛説長阿含經卷第十八』1-114）

然其還家。各自放逸。（失譯人名今附秦録『別譯雜阿含經卷第九』2-435）
『敦煌變文校注』には用例32用例がある，4例を示す。

須臾黃昏，各自至營。（『李陵變文』）

汝與眾僧眾，火急各自回避。（『廬山遠公話』）

雀兒但為鳥，各自住村坊。（『燕子賦』）

各自題詩一首：（『百鳥名』）

塩見（1995）では、「この「自」は接尾語とみてよく，唐詩では頻用されるもののひとつである。六朝詩では，陶淵明詩をはじめとして散見するが，まだ唐詩ほどは頻用されていない」と説明している。松尾（1987）の中で，「「～自」も二音節副詞によく用いられる接尾辞。めいめい，それぞれの意」と説明している。王（2002）では「「自」は単音節副詞の後に使われ，その語と複合して二音節語になった，「自」は虚化している」とされる。

『日本書紀』の訓点では，多くの訓点本が無点で一語で訓んでいるか二語で訓んでいるが不明の分類としたが，北野本兼永点で「（オノモノモ）ミツカラ」と二語として訓み，誤訓に近い例が1例ある。

本資料では，「各」が無点で「自」を「（ミツカ）ラ」と訓んでいるので，不当な和訓である。

II-2 二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない例

(II-2-1) 更不

<1> 皆悉発露。不敢覆蔽。未作之罪。更不復作。p.45 更に不し復作^ラ

<2> 悪更不敢造。亦如未来諸大菩薩修菩提。p.45 更に不し敢て造^ラ

〈3〉 未来之惡更不敢造。亦如現在十方世界 p.45 更に不敢^ラて造

〈4〉 作之罪願得除滅。未来之惡更不敢造 p.45 更に不敢^ラて造

〈5〉 未来業障更不復起。何以故。善男子。 p.47 更に不復^ラ起

〈6〉 此是実有。余皆虚妄。於後更不審察思惟。 p.93 更に不審^ス察し思惟^セ

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると『漢書』1例、『後漢書』1例、『晋書』9例、『梁書』1例、『魏書』15例、『隋書』4例、『樂府詩集』2例、『世說新語』1例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』24例がある一部の例を示す。

起皮山南，更不屬漢之國四五，（『漢書』・卷96）

四章更不得朔餘一。（『後漢書』・志第二）

室家分離，咸更不寧。（『晋書』・卷46）

所部文武更不追攝。（『梁書』・卷56）

良由水大渠狹，更不開瀉，（『魏書』・卷56）

臣更不理曠，（『隋書』・卷25）

預取之處，後更不生。（『祖堂集』・卷1）

更不飽五母之宅？（『世說新語』・捷悟第11）

戎衣更不著，今日告功成。（『樂府詩集』・卷20）

仏典の用例を「CBETA 電子佛典」を利用して検索すると3412用例が存在する。2例を示す。

更不殺盜及非法等。（隋天竺三藏闍那崛多等譯『起世經卷第八』1-347）

更不敢言此處常恒無有變易。（失譯人名今附秦錄『別譯雜阿含經卷第六』12-413）

『敦煌變文校注』には27例がある，4例を示す。

何處藏身更不聞。（『捉季布傳文』）

前眼相看，更不用憂慮。（『廬山遠公話』）

白庄得錢，更不敢久住，（『廬山遠公話』）

更不是別疾病，是坐俊風（『維摩詰經講經文』）

塩見（1995では「都」は「すべて」の意であるが、「不」と結合することにより「全然……ではない」「まったく……ではない」意となる。これは「都

無」「更不（無）」「絶不（無）」「竟不（無）」「総不（無）」「渾不（無）」なども同様であって」とする。『日本書紀』の訓点では、「サラニ……ズ」と訓み和訓一語としては訓んでいないが文意は外れてはいない。

本資料では、「(サラ) に……じ」「(サラ) に……ず」と訓み和訓一語として訓んでいないが、文意は外れていない。

(II-2-2) 更無

〈1〉是故説常。善男子。離無分別智。更無勝智。p.26 更に無し勝たる智

〈2〉更無余飲食 可濟此虚羸。p.189 更に無し餘の飲食として

〈3〉此虎飢火烧 更無余可食。p.195 更に無し^{キモノ}余の可食

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると『漢書』0例、『後漢書』0例、『晋書』1例、『梁書』2例、『魏書』22例、『隋書』13例、『楽府詩集』9例、『世説新語』0例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』21例がある一部の例を示す。

貨本不多，又更無增益。（『晋書』・卷26）

俦今考古，更無二謀。（『梁書』・卷5）

父母，祖父母年老，更無成人子孫。（『魏書』・卷7）

更無別法可得成佛。（『祖堂集』・卷3）

更無相逢日，寧可相隨飛。（『楽府詩集』・卷58）

仏典の用例を「CBETA 電子佛典」を利用して検索すると5072用例が存在する。2例を示す。

更無所為唯受勝樂。（隋天竺三藏闍那崛多等譯『起世經卷第八』1-347）

除此正法更無救護。（北涼天竺三藏曇無讖譯『大般涅槃經卷第十』12-422）

『敦煌變文校注』には31例がある。3例を示す。

今日更無餘物報女子之恩。（『伍子胥變文』）

直至天明，更無睡眠。（『盧山遠公話』）

我今來意，更無別心。（『破魔變』）

志村（1984）では「無」「不」は上古以来の基本的否定詞で、「都不」「都無」、これらの否定は、いわゆる否定の強調が行われる。」とする。『日本書紀』

の訓点では、「サラニ……ナシ」と訓んでいる。

本資料では、「(サラ)に……(ナ)し」と訓んで一語の和訓としては訓んでいないが文意は外れていない。

(II-2-3) 終不

〈1〉 設令有違者。終不敢覆藏。p.36 終不_レ敢_レ覆_レ藏_ニ

〈2〉 隨其所願。悉得成就。終不虛然。p.155 終に不_レ虚_レ然_ニは

〈3〉 終不行惡法。見惡而捨棄。p.162 終に不_レ行_セ惡法_ヲ

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると『漢書』64例、『後漢書』42例、『晋書』54例、『梁書』15例、『魏書』38例、『隋書』16例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』16例、『樂府詩集』26例、『世說新語』8例がある一部の例を示す。

賊非敢欲杀之也，而莽終不諭其故。（『漢書』・卷69）

虽王公大人，終不屈从。（『後漢書』・卷80）

虽盜賊艱急，終不棄之。（『晋書』・卷90）

我死而后已，終不能傾側面从。（『梁書』・卷53）

一不相問，今日之后，終不相舍。（『魏書』・卷88）

切須之处，終不可得。（『隋書』・25）

宁可永劫沉沦，終不求諸聖出离。（『祖堂集』・卷4）

如妇兄弟欲迎妹还，終不肯归。（『世說新語』・德行第1）

望君終不見，屑泪且长吟。（『樂府詩集』・卷17）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を検索すると「終不」は9210用例がある。2例を示す。

其有難問者。終不猶豫。（符秦罽賓三藏僧伽跋澄等訳『僧伽羅殺所集經卷下』224-17）

終不疲厭。何以故。（于闐國三藏實叉難陀奉制訳『大方廣佛華嚴經卷第四十三』154-10）

『敦煌變文校注』には4例が存在する、2例を示す。

粗飯一餐終不惜，愿君且住莫匆忙。（『伍子胥變文』）

阿婆終不敢留住，未审新妇意内如何？（『秋胡变文』）

志村（1984）では「否定副詞は上古語に数多くあったが，中古に単純化される。「無」「不」は上古以来の基本的否定詞で，中古にもっとも代表的な否定詞となる，「不」は六朝の場合，「是」をともなう否定に「非是」と「不是」を双方用いる，これらの否定は，また「都」や「将」をともなって，いわゆる否定の強調が行なわれる。唐代には「了不」，「判不」「並不」などが現れる。ほかに「終不」や，「恨不」，「恨無」なども見られる。」とする。

本資料では「（ツヒ）に……ジ・ズ」と訓んでいて，「終不」を一語とする訓法は構築し得ていないが，文意は外れていない。

（II-2-4）都無

〈1〉如猛風吹倒大樹。心迷失緒。都無所知。p.194 都^ス無^ルなり所知

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例，『後漢書』0例，『晋書』2例，『梁書』2例，『魏書』6例，『隋書』2例，『楽府詩集』0例，『世説新語』16例，『遊仙窟』0例『祖堂集』10例がある一部の例を示す。

人人皆有所説，惟敦都無所關。（『晋書』・卷98）

遣霸先守京口，都無備防（『梁書』・卷45）

崇欽已下伏地流汗，都無人色。（『魏書』・卷48）

自衒自媒，都無慚恥之色。『隋書』・卷66）

謝子遠來，都無只對。（『祖堂集』・卷5）

以示韓康伯，康伯都無言。（『世説新語』・言語第2）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」で検索すると4787用例がある，2例を示す。

當觀一切都無所有。（傳法大師臣施護奉詔譯『佛説大生義經』1-846）

都無生死亦無涅槃。（梁三藏曼陀羅譯『大寶積經卷第二十七』11-147）

『敦煌變文校注』には17例がある，4例を示す。

遣打布鼓，都無音響。（『前漢劉家太子傳』）

此時先來貧虛，都無一物。（『廬山遠公話』）

數日尋逐，都無踪由。（『葉淨能詩』）

改變顏容，都無人色。（『八相變』）

「都無」は「更不」の条で説明したように、「都」は「すべて」の意であるが、「不」と結合することにより「全然……ではない」「まったく……ではない」の意味となる。

『日本書紀』の訓点では、本資料と同じく「カツテ……ナシ」とする訓法の外に「フツクニ……ナシ」も見られる。共に「都無」を一語とする訓法を構築し得ていないが、文意は外れていない。

（II-2-5）非所

〈1〉 声聞独覚非所量。大仙菩薩不能測。p.202 非_ナ所_ニ量^ル

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』43例、『後漢書』15例、『晋書』43例、『梁書』8例、『魏書』20例、『隋書』8例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』0例、『樂府詩集』8例、『世説新語』4例がある。一部の例を示す。

卑君尊臣，非所宣称，（『漢書』・卷76）

而妄称引羌胡杀子荡肠，非所宜言。（『漢書』・卷98）

不堪久待，选荐之私，非所敢当。（『後漢書』・卷26）

非所见之难，直以不同害理也。（『晋書』・卷26）

酷非所闲，不喜俗人，与之共事。（『梁書』・卷34）

州之与辰，非所可法，（『魏書』・卷32）

自然而有，非所造为，（『隋書』・卷35）

负心岂不慚，永誓非所望。（『樂府詩集』・卷36）

天命修短，故非所计，（『世説新語』・语第2）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」で検索すると3742用例がある，2例を示す。

甚深非所演説如虚空甚深故此法甚深。（西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師賜紫

臣施護奉 詔譯『佛説佛母出生三法藏般若波羅蜜多經卷第十五』638-14）

了知已觀想此身。破壞不實非所愛樂。(西天譯經三藏朝奉大夫試光祿卿傳法大師賜紫

臣施護奉 詔譯『佛說大生義經』846-9)

『敦煌變文校注』には用例がない。

本資料では、「(トコロ)に(アラ)ず」と訓み「非所」を一語とする訓法を構築し得ていないが、文意は外れていない。

(II-2-9) 無非

〈1〉無非智撰。一切諸法。p.31 無し非(ヲサ)メラレずいふこと智に撰

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』2例、『後漢書』2例、『晋書』3例、『梁書』1例、『魏書』2例、『隋書』2例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』7例、『樂府詩集』1例、『世說新語』1例がある。一部の例を示す。

群臣同声，得無非其美者。(『漢書』・卷77)

婦人之职，無非无仪。(『後漢書』・卷18)

人無非父而生，职无非事而立。(『晋書』・卷70)

天下雍熙，無非任贤之功也。(『梁書』・卷77)

無非甚泰，其间寻常。(『魏書』・卷58)

长史作数百语，無非德音，如恨不苦。(『世說新語』・赏誉第8)

郁郁黄花，無非般若。(『祖堂集』・卷3)

诸所与交通，無非豪杰大猾。(『樂府詩集』・卷29)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」で検索すると2804用例がある，2例を示す。

我身若無非理作意。資引令住即便斷滅。(三藏法師玄奘奉 詔譯『大般若波羅蜜經卷第五百』997-20)

無非如是一切無非妙(寶鬘寶國三藏般若奉 詔譯『大方廣佛華嚴經卷第十三』721-05)

『敦煌變文集』には5例がある。2例を示す。

不解略言光皎皎，無非只道色冥冥。(『維摩詰經講經文』)

菩薩無非現化身，声聞各总居权地。（『双恩记』）

本資料では、「(アラ) ずといふこと (ナカレ)」と訓み「無非」を一語とする訓法は構築し得ていないが、文意は外れていない。

(II-2-7) 並悉

〈1〉 此等諸物皆伐取。並悉細末作微塵。p.88 並に悉細末に

〈2〉 其心懷諂佞。並悉行非法。p.161 並に悉行む非法を

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』1例、『晋書』0例、『梁書』1例、『魏書』0例、『隋書』1例、『樂府詩集』0例、『世説新語』0例、『遊仙窟』1例、『祖堂集』0例がある。一部の例を示す。

二弟所得並悉劣少。（『後漢書』・卷76）

卜筮占決，並悉稱善。（『梁書』・卷3）

藥草俱嘗遍，並悉不相宜。（『遊仙窟』）醍醐本1344年点「並に、悉、」

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」で検索すると131用例がある、2例を示す。

並悉從於梵志出家。（隋天竺三藏闍那崛多譯『佛本行集經卷第四十二』3-847）

取乳頭香燒之。並悉性悟。（大廣智不空密譯『佛說金毘羅童子威徳經』21-367）

『敦煌變文校注』には3例がある、3例を示す。

並悉忠貞，為人洞達。（『伍子胥變文』）

業也命也，並悉關天。（『伍子胥變文』）

並悉總取心肝。（『伍子胥變文』）

王（1986，改訂2002）によると「並悉」は範囲を表す、「全部」の意味である。

『日本書紀』岩崎本平安中期点・凶書寮本1142年点・北野本鎌倉初期点が共に「(ナラビ) に (コトコド) ク」と訓んでいる。本資料では、(ナラビ) に (コトゴト) ク」と訓み「並悉」を一語とする認識はないが、文意は外れ

てはいない。

III 二字一語として訓んでいるか否か不明な例

(III-1) 一一

<1> 尽其形寿恭敬尊重。四事供養一一獨党。p.54 一一の獨党に

<2> 世尊最勝身金色。一一毛端相不殊。p.79 一っ一っの毛あり

<3> 而不能為一一衆生經於多劫在地獄中。p.195 為に一一の衆生の

漢籍用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』0例、『晋書』3例、『梁書』0例、『魏書』5例、『隋書』2例、『遊仙窟』1例、『祖堂集』6例、『楽府詩集』10例、『世説新語』0例がある。一部の例を示す。

一一申而释之，莫不厌服。（『晋書』・卷75）

小小细务，一一翻动。（『魏書』・卷78）

侍者八九人，弘度一一问之曰：（『隋書』・卷74）

为太子一身受于王位，为复国界一一受也？（『祖堂集』・卷3）

其僧去到，一一依前师指（『祖堂集』・卷14）

笙歌何处承恩宠，一一随风入上阳。（『楽府詩集』・卷43）

傍人一一丹罗袜，侍婢三三绿线鞋。（『游仙窟』）

仏典の用例を「CBETA 電子佛典」を利用して検索すると用例がない。

『敦煌變文集』には27例がある，2例を示す。

一一捻取自看之，咬指取血从头试。（『孟姜女变文』）

汉将得脱，归报帝知，言我单于，一一不济。（『李陵变文』）

志村（1984）では「一」においても、「ひとつ」から「すべて」の意味を持つに至る転回点が問題となる。「一一」は「ひとつひとつ」の意味とする。

本資料では、「(ヒト)つ(ヒト)つの」と訓んだ例があり「(音読)の」と訓んだ可能性もあり，一語として訓んだものか二語として訓んだものか，不明であるが，文意は外れていない。

(III-2) 更復

<1> 得一切智。因此善根更復出生。p.52 更に復出生セラむ

〈2〉得堅固不可思議。満足上願。更復発起 p.94 更に復発一起し

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』4例、『晋書』1例、『梁書』2例、『魏書』0例、『隋書』0例、『楽府詩集』2例、『世説新語』0例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』1例がある。一部の例を示す。

真偽同貫，更復由此而甚。（『晋書』・巻41）

不宜更復加兵，搖動百姓。（『梁書』・巻1）

一豪吞盡巨海，于中更復何言？（『祖堂集』・巻9）

已能憔悴今如此，更復含情一待君（『楽府詩集』・巻72）

仏典の用例を「CBETA 電子佛典」を利用して検索すると662用例がある。ここでは南北朝・隋代の用例3例を示す。

更復前行。趣波波城。（東晋法顕訳『大般涅槃經卷第一』1-197）

將大火炬逆風而走。而彼火炬。更復轉燃。（隋闍那崛多訳『起世經卷第二』1-327）

莫復如此。然是衆生更復重作。（隋闍那崛多訳『起世經卷第十』1-362）

『敦煌變文校注』には4例がある。2例を示す。

悲歌已了，更復向前，悽愴依然。（『伍子胥變文』）

子胥哭了，更復前行。（『伍子胥變文』）

太田（1958，改定1981）には副詞接尾語としての「復」について述べた部分があり、「「復」の意味は消失しているものと解される。」とある。胡（2002）では、「復」には本来「再」や「還」の意味があり，一般に単音副詞，連詞後接尾辞であり，そのうち「復」の元来の語彙が虚化し，「更復」は前の副詞「更」の意味で用いられるようになったのである，と説明している。

魏晋以来主として仏典に用いられている「更復」という二音節語は、『日本書紀』の訓点は，北野本鎌倉初期点・兼方本弘安点共に「復」が無点で不明であるが，「(サラ)に(マタ)」と訓んでいるものと見做される。

本資料では，「復」字への加点は無く，不読としものか「(サラニマタ)」と二語として訓んだものか不明である。

(III-3) 最為

〈1〉一切声中最為上。如大梵響震雷音。p.79 最も為上勝也たること

〈2〉恭敬尊重最為第一。諸余国王共所称。p.98 最も為第一にして

〈3〉敬礼敬礼世間尊，於諸母中最為勝。p.140 最も為勝なり いますヒトを

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』13例、『後漢書』7例、『梁書』1例、『晋書』3例、『魏書』11例、『隋書』11例、『楽府詩集』2例、『世説新語』0例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』1例が存在する。一部の例を示す。

魏文侯最為好古。(『漢書』・卷22)

車甲兵馬最為猛盛。(『後漢書』・卷11)

于彼震旦，最為殊勝。(『梁書』・卷54)

宗室之中最為俊望。(『晋書』・卷38)

恃強憑險，最為狡害。(『魏書』・卷42)

最為無禮。(『魏書』・卷42)

參校積時，最為精密。(『隋書』・卷17)

殺利王種最為高貴。(『祖堂集』・卷1)

屬城咸有土，吳邑最為多。(『楽府詩集』・卷64)

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を検索すると 3083 用例ある。ここでは 3 例を示す。

於諸行人最為勇健。(蕭齊天竺三藏曇摩伽陀耶舍訳『無量義經德行品第一』9-388)

我於一切最為殊勝。(東晋天竺三藏佛跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經卷第十一』9-471)

是經甚深最為希有。(僧祐録云北涼録第二訳『不退轉法輪經卷第四』9-252) 『敦煌變文校注』には 3 例存在する。

柔而直，最為妙，不得凶粗多強拗。(『維摩詰經講經文四』)

散香花，乘寶象，獅子金毛最為上。(『雙恩記』)

西方佛國最為精。(『維摩詰經講經文七』)

太田 (1958, 改訂 1981) では「最為」について、「《最為》は くーばん……

である」という意味であるが、《為》が接尾辞化する傾向は古くからみられる。《最》は直接には《為》を修飾するものである。しかし、事実上、その重点はあとにくる語にあって、《為》はさして重要なものではない。そのため、《最為》で一つの語となり、《為》が接尾辞となってしまったわけである。」と述べる。また、劉（1944，改訂1963）によると、「最為」は「きはめて、もっとも」の意味であり「為」は接尾語である、とされている。

本資料では「為」に加点したものはなく、不読にしたものとも見られるが〈3〉の例からすれば『日本書紀』の訓点と同じく下の句に付けて「イマス」にあたるものとして訓んでいるとも見做され、一語として訓んでいるか否か不明である。

(III-4) 悉皆 68例があり、4例を示す。

- 〈1〉 悉皆盈滿。生希有心難遭之想。時彼貧人為。p.9 悉_レ皆
- 〈2〉 苦悉皆尽故。説為清淨非謂無體。p.29 悉皆
- 〈3〉 隨喜所有善根。我今作意。悉皆^レ攝取。p.52 悉_レ皆
- 〈4〉 令彼国主及以国人。悉皆安隱遠離災患。p.98 悉_レ皆

漢籍の用例を『国学宝典』を利用して検索すると、『漢書』0例、『後漢書』2例、『晋書』5例、『梁書』8例、『魏書』12例、『隋書』1例、『楽府詩集』0例、『世説新語』0例、『遊仙窟』0例、『祖堂集』16例がある。一部の例を示す。

于是西域五十余國悉皆納質内屬焉。（『後漢書』・卷47）

文武不堪苛政，悉皆散走。（『晋書』・卷35）

自是湘部諸郡，悉皆蜂起。（『梁書』・卷19）

後園鷹犬，悉皆放棄。（『魏書』・卷12）

人間甲仗，悉皆除毀。（『隋書』・卷2）

五百宮人，悉皆得睡。（『祖堂集』・卷1）

仏典の用例を「CBETA 電子仏典」を利用して検索すると、7591用例がある。2例を示す。

深至咽喉。悉皆熱沸。（隋天竺三藏闍那崛多等譯『起世經卷第三』1-322）

諸人民等悉皆出家。(西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚卿傳法大師臣施護奉詔譯『佛說護国尊者所問大乘經卷第四』12-14)

『敦煌變文校注』には15例がある。4例を示す。

兵士悉皆勇健，怒叫二聲。(『伍子須變文』)

應是山澗鬼神，悉皆到來。(『廬山遠公話』)

妃後，姝女，悉皆歡笑。(『葉淨能詩』)

身肉悉皆充供養，經過千劫不為難。(『仏説阿彌陀經押座文』)

「悉皆」は範囲を表す副詞であり、「盡，全部」の意味である。王(1986)では「悉皆」は複合虚詞とする、「悉」と「皆」とが連合式複音詞を構成し、仏典用語で、六朝時代から用いられた二字漢語である、現代漢語では使用しないとす。『日本書紀』の訓点では、岩崎本平安中期点・前田本院政期点・北野本鎌倉初期点共に「悉(ク)に皆」、寛文九年版「(コトゴト)ク(ミ)ナ」と訓んでいる。

本資料では、「悉^ク皆」と加点されているもの60例、無点のもの8例であり、片仮名「ク」は総て「悉」字に加点されているので、「皆」を不読にしものか「(ミナ)」と訓んだものか不明。

4 まとめ

以上、『金光明最勝王經』中の二字副詞15語を対象として検討した結果、二字一語として訓んでいる例が4語あり、量的には全体の3分の1程である。また、二字一語として訓まず、和訓も不当な例は1語あり、二字一語として訓んでいないが文意は大きく外れていない例が7語と多い。二字一語として訓んでいるか否か不明な例が4語ある。『日本書紀』の訓点資料と異り、仏典の訓読では単語を音読することも多いので、二字一語として訓んでいるか否か不明と言わざるを得ない例も生じている。仏典の代表的平安初期訓点資料である西大寺本金光明最勝王經平安初期点の検討結果からも口語的二字副詞を一語として訓む訓法は構築し得ていないが、文意は大きく外れてはいない訓法とは言い得るかと思われる。

使用テキスト

- 春日政治 (1942) 『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』岩波書店
中華電子協会 (1988~1991) 『CBETA 電子仏典』(大正新脩大藏經卷第一~五十五・八十五卷)

参考文献

- 太田辰夫 (1958, 改訂 1981) 『中国語歴史文法』江南書店・朋友書店
金岡照光 (1978, 改訂 1992) 『仏教漢文の読み方』春秋社
石塚晴通 (1982) 「日本書紀古訓の研究」(三島海雲記念財団 56 年度事業報告)
石塚晴通 (1983) 「日本書紀古訓について其の一, 其の二」(『天理図書館善本叢書月報 55, 56』)
志村良治 (1984) 『中国中世語法史研究』三冬社
石塚晴通 (1985) 「岩崎本日本書紀初点の合符」『東洋学報』66-1.2.3.4
石塚晴通 (1986) 「岩崎本日本書紀初点の合符に見られる単語意識」『築島裕博士還暦記念国語学論集』明治書院
王政白 (1986) 『古漢語虚詞詞典』黄山書社
松尾良樹 (1986a) 「金岡照光の『漢訳仏典』を読む」『和漢比較文学』第 2 号
松尾良樹 (1987) 「『日本書紀』と唐代口語」『和漢比較文学』第 3 号
松尾良樹 (1988) 「唐代の語彙における文白異同」『漢語史の諸問題』別冊, 京都大学人文科学研究所
太田辰夫 (1988, 改訂 1999) 『中国語史通考』白帝社
松尾良樹 (1991) 「『訓点資料を読む』—— 仏典の口語表現を中心に ——」『奈良女子大学叙説』第 18 号
朱慶之 (1992) 『佛典與中古漢語詞彙研究』文津出版社
程湘清 (1992) 『魏晉南北朝漢語研究』山東教育出版社
呉金華 (1994) 『世説新語考釋』安徽教育出版社
塩見邦彦 (1995) 『唐詩口語の研究』中国書店
伊藤丈 (1995, 改訂 2008) 『仏教漢文入門』大蔵出版
劉堅・江藍生 (1997) 『唐五代語言詞典』上海教育出版社
張涌泉・黄征 (1997) 『敦煌變文校注』中華書局
胡敕瑞 (2002) 『『論衡』与「東漢佛典詞語比較研究」』巴蜀出版社
程湘清 (2003) 『漢語史專書復音詞研究』商務印書館
李維琦 (2004, 改訂 2005) 『佛經詞語匯釋』湖南師範大学出版社

西大寺本金光明最勝王経平安初期点における中国口語起源二字漢語の訓読

唐焯（2009）『日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読』北海道大学出版会

附記 本論文は平成 20 年度 21 年度科学研究費若手研究（スタートアップ）の研究成果の一部である。